〔文献紹介〕

仲松弥秀著　古層の村　―沖縄民俗文化論―

前著の『神と村』にひきつづいた沖縄村落の神事に焦点をしぼったものであるが、十四篇の論文集である。冒頭の「古層の村」が前著に直接むすびつき、本書での著者の最大関心事を象徴する。「仲松サンは地理ではない」（沖縄在野の歴史家）との俗評は、神事という宗教・民俗領域へふみこんだことへの批難めいたものであろうが、たしかに著者は神事にとけこみ一種の「融即一の世界を形づくっている。宗教学者エリアーデのいう「聖なる空間」が展開され、俗なる読者の追随が容易でない側面をもつ。村人と神とのつながりは、むしろ著者と神がみの関係に他ならない。とはいえ、本書の他の論文、「沖縄の集落と土地制度」や「神事による沖縄村落の究明」などから考えると、著者が次第に聖なる空間へと登りつめ、融即世界を形づくる過程を推測させるものがある。

著者の世界への道すじの第一は、たとえ文献資料があったとしても、「その土地を自分で踏み、そして見聞するのでなければ納得することができない」（本書序文）という徹底した現地調査第一主義である。こうして、著者の足跡は南西諸島全域にわたっている。その結果は、宗教史学者の現地誤認を正す（「鳥越氏の『琉球宗教史の研究』を読んで」）ばかりでなく、神事を司る神女（ノロ）にさえも現地調査の事実をつきつけ、秘事を認めさせるほどにまで達する（「お嶽（タキ）・グシク・後生（グショウ）」）。さらに、日本へ伝来した仏教の寺に神仏習合の影を推定する（「同前」）などは、内地での教員生活中の実地調査から生じてきたとみられる。

もう一つの道すじは、さきの現地調査も全くオーソドックスな地理学的手法にもとづいていることであり、俗評はこの点を見落している。諸村落の立地にはじまり、分布・形態の分析から村の聖所（お嶽・拝井泉・殿・神アサギ）・旧家の位置関係など、聖なる空間の景観構成要素が丹念に追跡され、やがてそれらが抽象化されて「融即一世界を形づくることが理解される。「拝井泉」の位置から村落移転の事実を示した地図（「神事による沖縄村落の究明」）などは、まさに聖なる空間の歴史地理そのものといってよい。

右のように整理するならば、著者の世界がある程度は理解されえよう。だが、俗なる空間から聖なる空間への転移には、非宗教的人間から宗教的人間への転化が必要であり、一種の断絶がある。本書には戦時中の地理学評論によせられた二論文（「琉球列島におけるマラリア病」、「糸満漁夫の形成と発展」）も含まれており、これもふくめて右のような抽象化過程がたどれるような構成がとられていたらと思うのは、俗なる空間にあくせくする後学の身勝手な注文かもしれない。

本書の諸論文でも紙数制限というワクによって、著者の長年にわたる現地調査結果が網羅されたものとはいいがたい。それだけに、著者の調査の集大成と、その上に形づくられた聖なる空間において古層の村の神と人とのコスモスが展開されることを期待したい。東恩野実惇（『南島風土記』）をこえるのは、著書をおいてないと信ずるからであり、もとより尨大な量の出版の問題もあろうが、著書

の御健筆を念じて後学の支相の紹介を閉じる。（池野　茂）

（四六判　沖縄タイムス社　―那覇市久茂地町二丁目二ノ二―
一九七七年刊　一、〇〇〇円）

菊地利夫著　歴史地理学方法論

二〇世紀後半は歴史地理学にとって方法論確立の新時代となり、歴史地理学に新しいテラ・インコグニタが出現したので、未知の大陸を究める探検が始まった。そこで本書はその未知の大陸を望見したにすぎないと著者はいう。しかし、それは謙遜であって、周密な準備をもって、精緻な観察と分析が加えられ、明晰な論理でもって叙述を展開したのが本書である。

著者は冒頭に、歴史地理学とは過去の地理を復原し、これを説明し、叙述する科学であり（一章）、その対象である地域空間は科学の発達によって概念が変化し（二章）、さらに、その本質理論では地域空間が如何なるものであるかということを究明するのに、環境・景観・地域・分布・図形の各理論があり、多様化されており、これは研究者の学問的信念によって取上げた方が違うという（三章）。

次に、歴史地理学の論理構造として、総合的・個性記述的論理、理論的・法則定立的論理、および理解的・解釈的論理の三構造の鼎立上にあることを検討し、時代によって、その比重が異なり傾倒方向が若干違うと説く（四章）。新しい歴史地理学は歴史学と対立するものではなくて、空間的属性が時間を追って変化する時空連続体の時間的変化の様相を究め、その理論並びに法則を把握する科学であろうと問いかけている。

歴史地理学として避けて通れないのが、過去の復原であり（五章）しかも、歴史地理的諸事象の説明に因果論・確率論・機能論があり（六章）、さらに時系的説明・発生的説明・発展段階的説明・仮定的プロセスによる説明があるという（七章）。そのように、過去の地理を復原すると、その知識も集積する。それらの知識は、プリンスによると、実在・抽象・知覚の三類型に分かれる（八章）。それらのうちの知覚的知識については、改めて章を設け（九章）、従前の歴史地理学は、過去の地理を外部から考察し、事象の個性的な側面か、事象の法則的な側面を強調してきたが、文化的な事象の発生となる知覚的知識の理解、すなわち内面から本質を把握しなければならないと力説している。これが本書の最も特徴とするところである。

なお、歴史地理学の叙述理論について、ベーカーのその叙述理論と三知識領域を組合わせて説明し（十章）、歴史の地理的解釈、地理の歴史的解釈、地域（景観）史的叙述（十一章）、時の断面の復原（十二章）、時間的断面の堆積型叙述（十三章）、空間進化系列型叙述（十四章）、時空連続型叙述（十五章）などについて論説している。それらのうち注目したいのは、時空連続型叙述理論で、これは地理的事象を形成している諸要素が相互に関係して構成しているが、それぞれの方向に変化することの理論を説述しているのである。要するに　インフラストラックチュアとエレメントストラックチュアとの関連によって変化を考察すべきことを力説している。こ